

平成二十七年
度
国
語
問
題

監督かんとくの先生の説明があるまで、このページをよく読んで待ちなさい。
先生の指示があるまで、この問題用紙を開いてはいけません。

〔受験上の注意〕

- (1) 試験時間は50分間です。
- (2) 試験問題の内容についての質問はできません。それ以外のこと
で質問があれば、手をあげて先生に聞きなさい。
- (3) 先生の指示をうけてから、問題用紙と解答用紙の両方に受験番
号と氏名を記入しなさい。
- (4) 解答はかならず解答用紙に記入しなさい。
- (5) 選択問題せんたくは記号で答えなさい。
- (6) 字数が指定されている場合、句読点や符号ふごうも一字と数えなさい。

受験番号
氏 名

□ 次の各問いに答えなさい。

問一 次の——線のカタカナを漢字に直しなさい。ただし、送りがなはひらがなで書くこと。

銀行にお金をアズケル

問二 次の熟語の読みの組み合わせとして最も適切なものを選びなさい。
「台所」

ア、音読みと音読み イ、音読みと訓読み
ウ、訓読みと音読み エ、訓読みと訓読み

問三 次の文は「熟」という漢字を漢和辞典で探すときの方法をまとめたものです。解答欄の指示に従って答えなさい。

「熟」の音は□1であるので、音訓さくいんで引けるが、部首さくいんでは□2のところを引けばよい。総画数は□3となる。

問四 次の四字熟語で□に漢数字が入らないものを一つ選びなさい。

ア、奇想□外 イ、悪事□里 ウ、□心不乱 エ、□部始終

問五 次の語句の意味に最も近いものを選びなさい。

「手ごたえがなく、張り合いのないこと」

ア、対岸の火事 イ、立て板に水
ウ、蛙の面に水 エ、のれんに腕押し

問六 次の例と同じ関係のものを一つ選びなさい。

例 自発—強制

ア、納得—了承 イ、手段—方法
ウ、権利—義務 エ、理由—事情

問七 次の□に入る漢字を答えなさい。

降 ↓ □ ↓ 手
山 ← → 火

問八 次の——線のカタカナ語の意味として適切なものを一つ選びなさい。

ハトは平和のシンボルである

ア、規範 イ、例示 ウ、象徴 エ、暗号

問九 次の中で、数量を表す語の使い方として適切でないものを一つ選びなさい。

ア、テントを一隊準備する イ、試合でテニスコートを四面使う
ウ、ざるそばを三枚注文する エ、テーブルに箸を二膳置く

問十 次の慣用句の使い方として最も適切なものを選びなさい。

ア、姉のまづい料理に父は思わず舌を巻いた
イ、話の骨を折ることは良くないことである
ウ、友だちとの一年ぶりの再会に胸がおどる
エ、きのうの彼の服装は周囲の目を光らせた

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

素直に描く絵には、自然と自分が出ます。反対に変わった表現で制作すると、どんどん自分の本質が作品から消されていってしまうのです。自分がどこかにいつてしまい、わからないという絵になっていつてしまいます。そして自分でも二度とそんな世界は描けない、という感じになってしまいます。それはよいことはありません。

あるひとときの感情の高ぶりや気まぐれが画面を支配してしまうということは、ひとつの気持ちの記号のようなものになってしまいます。つまり「信号」のようなもので、□^①なものなのです。オレは楽しい、とか、わたしは悲しい、とか。信号として他人に伝わったとしてそれがいつた何になるのでしょうか。美術は全人格的な表現です。喜怒哀楽があつてはじめて「人間的」です。そうでなければすぐ飽きられてしまいます。

絵とはたしかに人間的なものです。楽しいとき、悲しいとき、うれしいとき、さまざまな心に対応してくれる多重的な存在なのです。個性的、と思つてやればやるほど、一面的で単視眼的、むしろ一人の人間の心の限界が見えてしまいます。人間の考えることなどたかがしれていますし、そもそも人間は皆同じですから、結局そのようなことは皮肉にも皆似てきてしまうのです。わざわざ絵にまでも十分わかつている、そう思われてそれでおしまいです。いかにそれを超えるか、ということこそ目指すべきものです。

そもそも個性というものは、髪を金にソメタとか、青いアイシャドーをつけました、とかそんなものではないのです。自分から押し出していけるものではないのです。私の経験から言えば、「私は個性的だから」と言っている人が個性的であつたためしはありません。ただ癖っぽく、わがまま

で、思い込みが強いだけなのです。

超一流の国際展のレセプションに出席してみると実に面白いことに気づきます。④^④芸術家っぽい変わった服装をしている人は、まず出品している作家ではありません。そうなりたいた二番手の連中や「とりまき」です。本人たちはグレーのスーツにノーネクタイとか実に地味なものです。びっくりするような格好で歩いている芸術家がいたら、まず間違ひなく作品は大したことありません。これは私の経験上の事実です。中身に自信がないので大げさな「よろい」に身を包んで歩いているのか、と思つてしまいます。そんなところで自己主張しないでほしいものです。

逆に「私は個性的でなんかない」と本気でそう思っている人は、とんでもなく変わった作品をつくつていたりしますので、いわば要注意。これも本当です。自信の表れ、ということと、もう一つ、夢中になつてものをつくっているの、他人から見ても服装が個性的かどうかなどという相対的なことにはまったく関心がないのでしょうか。個性とは隠してもどうしようもなくにじみ出てきてしまうものなのです。このような人に出会うと、経験上私は「おぬし、できるな」と直観的に感じ、思わず身構えてしまします。

⑥^⑥私はつねに個性は今以上なくていい、と公言しています。ギリシャ、エジプトの美術を思い出してください。個性的に描こうなどとはけつして思っていない作品です。だからこそ、その時代という強い個性が結果的に浮かび上がつて、なおかつすべてを超えて人々に理解されているのです。大切なのは普通の人が見て、何で今までこれがなかったのだらうと思えるような、切り口の独創性ということです。良いものはすべてずっと前からあつてもおかしくないと思われような、そんな普通で確かなものです。今までなかった、それに気づくということ。その切り口を見つけ出すこ

と。これが大切です。

普通の人が、普通に見て感ずること、これが時代を超え、民族を超え、思想や宗教さえも超えてゆく普遍性^{ふはんせい}ということです。新鮮な切り口こそ求められているものです。そして普通にしても十分個性は出ているものです。あなたを間違える友達はいません。これが必要にして十分な個性です。無個性な人というのはいるわけがありませんし、もしいたらこれは逆に驚くべき個性です。そんなさまざまな個性の人たちが口をそろえて美しいと言う、美味しいと言う、それは本当に尊いものです。コトナル私たちが皆同じ人間だ、と教えてくれているのです。

また石膏デッサンをやると個性がなくなる、と本気で考えている人たちが大勢います。これは困ったことです。本人の持っている癖^{くせ}つばさや変なこだわりを直してゆくの、これはとても適しているのです。

石膏デッサンをやったために個性が消えた、そんな人がいたら会ってみたいものです。同じ給食を食べたらクラスメイトが皆同じ顔になつてきたということと同じくらい馬鹿馬鹿しい話です。

石膏デッサンを通してもつとそつくり描こう、もつともつと似せたい、その思いが無心になつて物に迫る「夢中」ということを教えてくれるのです。

私は二浪して芸大に入学しました。本当に多くの石膏をデッサンしました。その結果わかったことですが、本当にすばらしいデッサンはみごとに描いた人の良さ、美意識、空間感覚などが表れて、それは美しいものです。つまりとても「個性的」なものです。描いた人思わず想像できます。こんな人だろう、と思うと、だいたい当たっているようです。

結局、個性とは、消そうとしても浮かび上がってくるもの。にじみ出てくるもの。付け加えて出してゆくものではないということが

問一 — に入る言葉として最も適切なものを選びなさい。

ア、安直 イ、確実 ウ、単純 エ、安全

問二 — 線①「信号として他人に伝わったとしてそれがいったい何になるのでしょうか。」の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア、絵は作者の心情を信号として見る人に伝えるのではなくて、絵を見る人のさまざまな心に対応する多重的なものでなければ、受け入れてもらえない。

イ、絵はさまざまな心に対応する多重的なものであるから、作者が限られた感情のもとで描いたとしてもその主張が確実に伝わり、皆に受け入れてもらえる。

ウ、絵は見る人がどのような見方もできるあいまいな作品として意図的に仕上げることで、さまざまな心に対応する多重的なものとならなければならない。

エ、絵はそもそも描くのも見るのも人間であるのだから、さまざまな心に対応する多重的なものを目指そうとしたところで、作者の心の底が見えて飽きられてしまう。

ここからもわかります。自分の中から「癖つばさ」や「あく」、「性格的なこだわり」とか「思い込み」、これをどうやって取り除いていくか。そのあと、ここには「個性」が美しく残ります。

石膏デッサンや静物のデッサン、スケッチなどを通して、自己主張し、変に自分を出すのではなく、りんごを描くときは、実に不思議なものが目の前にある。なんだろう、なんてすごい色、形なんだろう、神様、なかなかやるな、と叩いてみたり、蜜がたくさん詰まった美味しそうな香りを嗅いでみたり、持ってみたりする。とにかく五感で観察をして「そつくりを描く」ことを心がけることです。これができなくては「物」に迫ることも、「自分」を知ることできません。

とにかく自然に素直に見て、素直に描く。このことが一番です。変わったことをしよう、奇を衒ったことをやろう、ショックやセンサーションを与えよう。そういうようなことはやればやるほど、自分自身もわけがわからなくなってしまう。どこかに埋もれていつてしまう。素直に見て、素直に描くというのは本当に大切なことなのです。

最後はその人の人間性なのです。自分自身が鏡のように絵の画面に出てしまします。人間の個性が実は作品の個性になつていくのです。こんな人が描いたのだらう、とわかるわけです。素直に見て、素直に描く。ものに出合ったときの感動や描きたい気持ち、小さな驚きや自分の感性を揺り動かすようなちよつとした出来事にも心を配るように心がけるのです。そういうやさしさをつねに持つことによって、素直に感じて本当の自分らしさ、すなわち「個性」的に描くことを学べるのです。

※レセプション…歓迎会

(千住博『絵を描く悦び 千住博の美術の授業』)

問三 — 線②「いかにそれを超えるか、ということこそ目指すべきものです。」とあるが、何を見つけることが大切だと述べているか。最も適切なものを選びなさい。

ア、強い個性
イ、切り口の独創性
ウ、美意識や空間感覚
エ、自分への自信

問四 — 線③「ソメタ」・⑦「コトナル」のカタカナを漢字に直し、送りがない書きなさい。

問五 — 線④「芸術家っぽい変わった服装」について比喩表現を用いて言いかえている部分を文中から十字以内で抜き出しなさい。

問六 — 線⑤「相対的なこと」の意味として最も適切なものを選びなさい。

ア、他と比べて明らかに間違っていること
イ、他と比べるまでもなく飛びぬけていること
ウ、他と比べてみると非常にすぐれていること
エ、他と比べたうえで成り立っていること

問七 ―線⑥「私はつねに個性は今以上なくていい、と公言しています。」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、個性とは、自分が消そうとすると逆に癖**つ**ばさやわがまとなつて表れてしまうものであるから。

イ、個性とは、自分が意識すればするほど自分の本質から遠く離れ消えてしまうものであるから。

ウ、個性とは、自分が隠そうとしてもどうしてもなくにじみ出てきてしまうものであるから。

エ、個性とは、自分が付け加えて出してゆくものではなく他人が見て感じ取るものであるから。

問八 ―線⑧「石膏デッサンをやる」ことを重視する理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、そつくり描こうと無心になることで「物」に迫ることや「自分」を知ることができるから

イ、そつくり描こうと無心になることで「個性的」な描き方を知ることができるから

ウ、そつくり描こうと無心になることで「すばらしいデッサン」というものを知ることができるから

エ、そつくり描こうと無心になることで主張すべき「自分」というものを知ることができるから

Ⅲ 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

離島である辰島に生まれ、漁師をめざす竜太。都会から島の分校に転校してきて、竜太とぶつかる中で深く島を愛するようになった灯子。

中学二年の竜太と灯子、一年の勇氣、あわせて三人の中学生は、本校の文化祭で展示発表するために「辰島ニュース」というローカル新聞をつくることになった。特集は「島の神社」に決まり、島にたくさんある神社について取材することとなった。九月の最終土曜日に、物知りできつすいの辰島人であり、七十六歳の今も現役漁師である下出徳治、通称トクさんから話を聞き、記事を作成した。

灯子の母がいつていたように、秋分の日をさかいに、日の入りが日々、思いきりよくみじかくなっていく。そのぶん夜が長くなる。

午後七時は、ひと月まえまでは夕方の七時といてもいい明るさだったのに、いまや完全に夜の七時だ。いわゆる街のあたりというものがなく、人通りがたえた辰島では、深夜の七時といっても通用しそうだ。漁船が帰ってきて、港が活気づくのは、もうすこしおそい時間だ。

民家の窓からカーテン越しにもれる、ほのかな光をたよりに、竜太はとちゅうで勇氣、灯子と落ちあいながら、トクさんの家にむかって歩いた。島の南西にある集落の中にある、板ぶきの古い家だ。

ランチ取材から一週間後。

放課後は毎日、土日もヘンジョウしてがんばったかいがあつて、「辰島ニュース」のソウカンゴウができた。まっさきにトクさんに見てもらいにいく。

文化祭まであと一週間あるけれど、今週末から三連休になるので、今週

問九 本文の内容として最も適切なものを選びなさい。

ア、「個性的」に描くには、自分の中の「癖**つ**ばさ」や「あく」、「性格的なこだわり」とか「思い込み」を追い求めることで実現が可能となるのである。

イ、絵の良し悪しを決める最後の決め手は描く人の人間性なので、多くの人に受け入れてもらうためにも、人にやさしい気持ちで接することが必要である。

ウ、絵の画面には鏡のように描いたその人自身が出てしまうので、個性的な作品と評価されるためにも、自分の個性を前面に出して描いていくことが大切である。

エ、ちよつとした出来事にも心を配れるやさしさを持てるようになる
と、素直に見たことを素直に描け、本当の意味での「個性」的な作品が生み出せるのである。

中に印刷して、文化祭のまえに島内の各家に配布するというスケジュールになっている。変更があればまだまにあうので、トクさんにチェックしてもらうためでもある。トクさんは、きょうは漁を休んだ。網仕事にあて、七時ぐらいなら帰っているから、そのころにくるようにといわれている。三人がおとずれたとき、トクさんはテレビをみながら、夕食を食べているところだった。食卓には、大きな鍋とお椀、焼き魚がのつた皿、缶ビールなどがならんでいる。

「ちようどよかった。トクさん、おみやげがあるよ」

といって、灯子が勝手知ったわが家のようにあがりこみ、台所へいき、持ってきた手みやげの惣菜を皿にうつし、食卓にはこんでくる。サバの南蛮漬、トクさんの好物だそう。

「おまえたちも食べていくか」

トクさんにそういわれると、灯子はふたたび台所へいき、三つのお椀とはしを持ってきた。竜太はあつけにとられた。

「いつのまに？」

「あれから二度ほどきたか？ タラを持っていくと、つぎの日、この子がサバの南蛮漬を持ってきてくれるんだ」

と、トクさんがこたえた。

あれから、とは、トクさんに神社の話をきいたあの日から、という意味だろう。

「お母さんが、持っていけつていうのよ」

と灯子はいったが、食卓のまわりで主婦のように立ち働しながら、なんだか楽しそう。トクさんもうれしそう。わるくない取りあわせだと竜太は思った。トクさんはひとり暮らしだし、灯子はこの島にとけこもうとしているわけだし……。

「じゃあ、いただきます」

竜太は食卓についた。夕食はまだだ。父、祖父、航平が（きょうは、えびす丸のついでに帰ってきたからになるので、漁があつた日の竜太の家の夕食はおそくなる。灯子が大鍋から取りわけてくれたお椀を受け取り、さつそく口をつける。みそ仕立ての漁師鍋だ。野菜と雑多な魚介類^{さかな}がはいっていて、いい味になっている。勇氣と灯子も食べはじめ、トクさんはめがねをとりにつてから、「どれどれ」と〈辰島ニュース〉を手にとった。

一面は、トクさんの写真つきの神社の記事、といっても、トクさんの話したことをそのままのせてある。そして、神社の絵が三枚。三枚しか必要ないとわかつていて、灯子は全部の神社を写生した。できたものの中から、気に入った三枚を自分でえらんだのだ。

「弁天さま、よくかけているでしょ」

トクさんのよこから紙面をのぞいて、灯子がいった。よほど気に入っているのか、だれにでもそうじまんしている。

「航平さんに、ほめられたんだから」

えっ、それは初耳だ。

「いつ？」

「かいているときに。絵が上手^{じょうず}なんだねって」
著名な画伯^{がくはく}にでもほめられたかのように、灯子は誇^ほらしげだ。航平が、写生^{しせい}をしている灯子に声をかけたこと、「よけいなこと、もういったかもな」といつていたことを竜太は思いだした。

「それで、はりきって、全部かいたんだ」

全部かいた灯子を、さすがにきちんとしている、えらいな、と尊敬していたのに。公正に判断すると、航平がいったことはよけいなことだったと

はいえないだろうが、航平はじつに女性への接し方が巧^{たくみ}みで、まったくしらけてしまう。

「それでつてわけじゃないよ」

と、灯子は□いいかえす。

「じゃあ、どうして全部かいたんだよ」

「かくのが楽しかったからよ」

「ほめられたから、だろ」

「そんなこと、どっちでもいいじゃないか」

と、勇氣がさえぎって、灯子は「そうよ」とむくれたままでつぶやいた。

トクさんは、そんな会話など耳にはいつていないようすで、紙面にじつくりと見いつている。

「絵も記事もよくかけている。上出来だ」

うらがえして、ランチとレシビ紹介^{しょうかい}にもざっと目をとおす。

「文化祭はいつだ」

来週だとこたええると、トクさんは自分が船をだして、倉部^{くらべ}まで送つていつてやろうと申しでてくれた。

学校行事で本校へいくときは、島を午後にする定期船ではまにあわないので、生徒の親が持ち船をだして送りむかえするのが慣例になっている。それが、勇氣の家の大黒丸になるのか、竜太のえびす丸になるのかは、いまのところ未定だった。

トクさんは、自分がすくなくらずめんどろを見た〈辰島ニュース〉に、さいごまでかわりたいのかもしれない。気持ちをくみとって、じゃあ、そうしてもらおうかな、ということになった。

「ついでに文化祭の見物にくればいいのに。その日は一般^{いっぱん}のひともきていいのよ」

「沖^{おき}でエンジントラブル起こしても、なんとかしてくれるだろうしな。またたのむつていつておいてくれ」
竜太はゆつくりと大きく息をすいこんだ。

「直接、本人にいいばいいだろ」

「ああ、そうだな」

トクさんはそういつて、ニヤツとわらつた。

灯子が、じつと竜太を見ている。目をあわせて、

「なに？」

とたずねると、灯子のかたほうのまゆだけをクイツと器用にあげた。

⑩「トクさんつて、名人^{めいじん}だね」

「なんの」

ききかえしたまま、こたえをまたずに、竜太は夜道を歩きだした。自分をとりかこむ空気が、やさしくやわらかくなっているのを感じながら。

（杉本りえ『明日は海からやつてくる』）

「航平に整備をたのんだら、船の調子がよくなったよ」
竜太はくつをはきかけていたので、かがんだままで「へえ」と、なにげなくへんじをした。

「あいつとでると心強いな」

これには心底びつくりして、思わずトクさんに顔をむけた。

「船の操作も安心^{しんしん}してまかせられるし」

そこらのド素人^{しろうと}とはちがうのだ。船舶免許^{せんぱくめんきょ}は持つてなくても、それぐらいできるだろう。子どものころから、父のすることはそばで何度も見ているのだから。竜太だつてできる。

問一 — 線①「深夜の七時といっても通用しそうだ。」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、日暮れが早まり、まるで真夜中のように静かで真つ暗だから。
イ、日照時間に合わせて、民家の電灯を落とす時間も早くなるから。
ウ、日の入りがみじかくなり、港が活気づく時間はもつとおそいから。
エ、夜が長くなって、民家の灯りだけでは防犯上危険な時間帯だから。

問二 — 線②「トクさんの家にむかって歩いた。」の目的として最も適切なものを選びなさい。

ア、〈辰島ニユース〉が完成したので一番はじめに見てもらい、土日も休まずに毎日がんばったことを報告するため。
イ、〈辰島ニユース〉が完成したので一番はじめに見てもらい、変更点がないか内容確認をもらうため。
ウ、〈辰島ニユース〉が完成したので一番はじめに届け、きょうは漁を休んでいるトクさんを元気づけるため。
エ、〈辰島ニユース〉が完成したので一番はじめに届け、三連休になるからすぐに印刷して島内の各家に配布するため。

問三 — 線③「ヘンジョウ」・④「ソウカンゴウ」を漢字に直しなさい。

問四 — 線⑤「勝手知ったわが家のように」の意味として最も適切なものを選びなさい。

ア、まるで自分の家のように大胆不敵にふるまう
イ、まるで自分の家のように明るくふるまう
ウ、まるで自分の家のようにぬけぬけなくふるまう
エ、まるで自分の家のように思うままにふるまう

問五 — 線⑥「竜太はあっけにとられた。」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、灯子が高まるで奥さんのように、台所でテキパキ動きまわっていることに感心したから。
イ、灯子が台所を行き来しても、トクさんが何も言わずにいるのが不思議だったから。
ウ、灯子がトクさんと、自分の知らないうちにすっかり親しくなっていることに驚いたから。
エ、灯子がトクさんの好物を知っていて、おみやげまで準備してきたことにびっくりしたから。

問六 — 線⑦「トクさんに神社の話をきいたあの日」とは何日前か。算用数字で答えなさい。

問七 — 線⑧「わるくない取りあわせだと竜太は思った。」の理由として最も適切なものを選びなさい。

ア、灯子がひとり暮らしのトクさんの世話を焼いて親しくすることで、トクさんのさびしさはまぎれ、灯子は自然と島になじむことができるから。
イ、灯子がひとり暮らしのトクさんの家に通うことで、トクさんの健康が保て、灯子は家事が身につき、島での暮らしに必要なことを知ることができるから。
ウ、灯子がひとり暮らしのトクさんとよく話をするので、トクさんの島に対する気持ちがわかり、灯子は〈辰島ニユース〉の情報を取材することができるから。
エ、灯子がひとり暮らしのトクさんと接することで、トクさんの漁師としての充実感が増し、灯子は人望のあついトクさんからいろいろ教えてもらうことができるから。

問八 — 線⑨「よけいなこと、」を十五字以内で説明しなさい。

問九 に入る言葉として最も適切なものを選びなさい。

ア、すばやく イ、大声で
ウ、きつちりと エ、むつつりと

問十 — 線⑩「トクさんって、名人だね」の説明として最も適切なものを選びなさい。

ア、竜太が航平に対してわだかまりがあることを知ったトクさんは、航平が漁師としてすぐれていると竜太に気づかせるように、さりげなく話をしている。このように、トクさんはひとひとの気持ちのバランスをとることが上手だということ。
イ、竜太が航平に対して反発心があることを知ったトクさんは、航平が船の整備士としてすぐれていると竜太に納得させるように、論理的に話をしている。このように、トクさんはひとひとの気持ちのバランスをとることが上手だということ。
ウ、竜太が航平に対してやきもちをやいていることを知ったトクさんは、航平が竜太のことを思っただけで灯子をほめたのだとわからせるように、やさしく語りかけている。このように、トクさんはひとひとの気持ちのバランスをとることが上手だということ。
エ、竜太が航平に対して激しい怒りをもつことを知ったトクさんは、航平が信頼できる素晴らしい漁師だということを竜太に認めさせるように、話を運んでいる。このように、トクさんはひとひとの気持ちのバランスをとることが上手だということ。

平成二十七年国語解答用紙

受 験 番 号	
氏	名

(注意) ※印の所には記入しないこと

合 計	※

一		
問六	問三	問一
	1 カタカナ	
問七		
問八	2 ひらがな	
		問二
問九		
	3 漢数字	
問十		
	問四	
	問五	

※

二			
問六	問五	問四	問一
		③	
問七			問二
問八			
	5	⑦	
問九			
	10		

※

三				
問九	問八	問四	問三	問一
			③	
問十		問五		問二
	問六			
	5		④	
		日前		
		問七		
	10			
	15			

※
